読売俳壇

矢島渚男 選

弥生土器に残る線刻捕鯨の図　出雲市　石川　寿樹

【評】郷土の博物館で見たのか、弥生土器に捕鯨のさまが線で刻まれていた。縄文から弥生への推移の背景には金属器発達などがあった。貴重な遺物。二例ある。

ひと山をうすべにいろに春が来た　山陽小野田市　磯谷　祐三

【評】季節の移りを大づかみにした把握がいい。山全体が薄紅色になってきた。

定刻のありやなしやの野焼かな　東京都　川上　福美

【評】野焼を見に出かけた。なかなか始まらない。風の具合などで、危険がいっぱいで、あらかじめ消防車が出動していたりする。満開の時より美しいかも知れぬ。

指先の弾みだしたる蓬摘み　泉佐野市　布野　寿

病棟に手を振る妻の霞みたる　豊中市　一色　正明

土摑む草の力や春田打ち　八幡市　会田重太郎

雪下ろせば引き戸軽々走りけり　所沢市　山本　七郎

氷りたる池に石投げ遅刻の子　諫早市　麻生　勝行

船縁をぎりぎり傾げ刈る若布　大阪市　今井　文雄

雪消えて発掘調査はじまりぬ　熊谷市　間中　昭

高野ムツオ 選

海女どちの黄金色なる磯焚火　河内長野市　平野　彰一

【評】若布漁だろうか。早春の海から上がって冷え切った体を焚火で温める海女たち。「黄金色」が過酷な労働に勤しむ女性を海から誕生した女神に変身させた。

舌出して吾子よ春の日甘いかい　東京都　佐藤　勝美

【評】子どもが、ふざけて父の前に舌を大きく出しただけだが、口語の呼びかけが父の愛情の深さを伝える。春日はどんな甘さだろうか。

靴紐の解けしままの花見かな　宮崎市　野中　一則

【評】休みなく働いている人だろう。ふと、見上げると頭上にもう満開の桜。靴紐を結び直す前のほんのわずかだが、得難い安らぎの花見。

かげろふの中に転びし一輪車　八王子市　斎賀　勇

裏山の裏にまた山花辛夷　高山市　直井　照男

驕るなと雪に諭されゐる如し　寒河江市　大谷　正行

凧の糸父の添え手を思い出す　青森市　天童　光宏

春の雪記憶の海へなだれ込む　宇都宮市　田村　成夫

枕もと母が置いたか桜餅　足利市　鈴木　一郎

死してなほ戻れぬ故郷原発忌　仙台市　鎌田　魁

正木ゆう子 選

無職とは色無きことば青き踏む　武蔵村山市　井上香津子

【評】そういえば、無職と無色は発音が同じである。無職とは色が無いのと似ているだろうか。そうならばちょっと寂しい印象かも。もっと前向きな良い言葉はないものか。

一雲に春嶺いさぎよく翳る　東京都　望月　清彦

【評】輝き渡っていた風景が、たった一朶の雲が太陽を隠したせいで、いっぺんに翳ってしまった。「いさぎよく」の擬人化が上手い。

風光るクレーの四角ミロの丸　東京都　本多　明子

【評】パウル・クレーとジョアン・ミロ。どちらの絵も抽象的。片や直線的、片や曲線的だが、四角・丸と単純に括ったところが、春らしい。

芹の根の長きもうれし鍋囲む　葛城市　二上　三六

古民家とふ大き抜け殻春の雲　相模原市　芝岡　友衛

和え物にオイル一滴春しぐれ　西宮市　平田　あい

長閑なる入換線の汽笛かな　横浜市　栃木　安穂

灼熱の蹄鉄叩く暮の春　習志野市　本庄　昭郎

種袋しゃかしゃかと振りまだ蒔かず　熊谷市　柿沼　好枝

咲きながら咲きながら伸ぶ風信子　東京都　松永　京子

小澤　實 選

春光や転校生は八頭身　新潟市　古泉　浩子

【評】新学期である。教室で先生から転校生が紹介されている。背がきわめて高く頭が小さいようだが、窓から差し込む春の日差しが眩しすぎて、顔だちまではわからないのだ。

鴨引くや重き内臓抱へつつ　北本市　萩原　行博

【評】春が来て鴨が北の国へと帰って行く。「重き内臓抱へつつ」がいかにも鴨らしい。こういう身で海を渡っていくことの難儀を思う。

きんぽうげ切り離されし貨車の下　栃木県　あらゐひとし

【評】線路脇のきんぽうげの花を眺めていたら、切り離された貨車の下になって見えなくなってしまった。それでもまだ気になっている。

行く春や見習い僧のゆか掃除　柏　市　川浪　勉

たんぽぽやペン先つくる町工場　東京都　斎木百合子

大欅張りある肌や木の芽時　河内長野市　宮内　天正

コップより溢るる酒や春の暮　青梅市　増田　正

交番の軒の巣箱の賑はへる　名古屋市　可知　豊親

春の雪に飛びつく子等や口開けて　大津市　星野　暁

啓蟄や補助輪なしで踏み出す児　香芝市　河野　嘉雄

短歌あれこれ　石川美南（歌人）

永井陽子とわたし

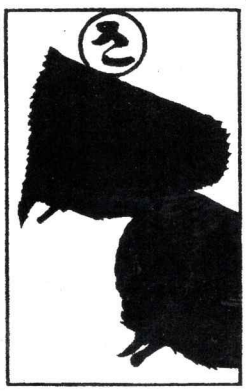
永井陽子の短歌を初めて読んだのは、中学校の図書室だった。何の予備知識もないまま手に取った歌集『モーツァルトの電話帳』の、不思議に軽やかな佇まいに心を奪われた。

るるるる……と呼べどもいづれかの国へ出かけてモーツァルトは不在

永井陽子

時空を超えてモーツァルトに電話できる豊かな想像力と、拭い切れぬ寂しさ（つながらない相手を待って受話器を握るときは、誰だって寂しい）。その両方を柔らかな韻律で束ねているところに、作者の魅力がある。

このたび、永井陽子の作品を『永井陽子歌集♭』（短歌研究文庫）の二冊に分けて文庫化した。生前の永井さんと全く面識のない私が編者の大役を担って良いのかずっと不安だったけれど、一ファンに過ぎないからこそ通じる、永井陽子への直通電話もあると信じたい。没後二十五年。多くの読者に届きますように。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭